

□ 甲・乙の文章を読んで、後の問いに答えよ。

甲、伊勢物語【第八十二段】

渚の院 昔、惟喬親王これたかのみこと申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花盛りに
は、その宮へ(1)なむおはしましける。その時、右馬頭みぎのうまのかみなりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、
その人の名忘れにけり。 1 狩りはねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。

今狩りする交野かたのの渚の家、その院の桜、ことにおもしろし。その木のもとに下りゐて、枝を折りてかざしに挿して、上中下かみなかしも、
みな歌詠みけり。馬頭なりける人の詠め a る、

A 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
と (2)なむ詠みたりける。また人の歌、

B 散ればこそ 2 いとど桜はめでたけれ憂き世に何か久しかるべき

とて、その木のもととは立ちて帰るに、日暮れになりぬ。

御供おほんともなる人、酒を持たせて野より出で来たり。この酒を飲み b てむとて、よき所を求め行くに、天の川といふ所に至りぬ。
親王に馬頭、大御酒 おほみき 3 参る。親王の 4 のたまひける、「交野を狩りて天の川のほとりに至るを題にて、歌詠みて杯はさせ。」
とのたまうければ、かの馬頭詠みて奉りける、

C 狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の川原に我は来にけり

親王、歌をかへすがへす誦じ給うて、返しえし給はず。紀有常、御供につかうまつれり。それが返し、

D 一年にひとたび来ます君待てば宿かす人もあら c じとぞ思ふ

帰りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒飲み、物語して、あるじの親王、酔ひて入り給ひ (3)なむとす。十一日の月も隠れ

(4) なむとすれば、かの馬頭の詠める、

E 飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあら なむ
親王に代はり奉りて、紀有常、

F おしなべて峰も平らになりな なむ 山の端なくは月も入らじを

問一 波線部の助動詞 a「る」・b「て」・c「じ」について、文法的意味と活用形を、後の【語群】からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ（それぞれ完答）。ただし、必ず、文法的意味・活用形の順で解答すること。なお、同じ記号を何度用いてもよい。

【語群】

ア	自発	イ	可能	ウ	受身	エ	尊敬	オ	使役	カ	推量	キ	打消
ク	打消推量	ケ	願望	コ	過去	サ	過去	シ	完了	ス	断定	セ	比況
ソ	強意												
タ	未然形	チ	連用形	ツ	終止形	テ	連体形	ト	已然形	ナ	命令形		

問二 二重傍線部(1)～(6)の「なむ」について、①・②の問いに答えよ。

① 二重傍線部(1)～(6)の文法的分類として正しいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア	〔1〕	〔2〕	〔3〕	〔4〕	〔5〕	〔6〕
イ	〔1〕	〔2〕	〔3〕	〔4〕	〔5〕	〔6〕
ウ	〔1〕	〔2〕	〔3〕	〔5〕	〔4〕	〔6〕
エ	〔1〕	〔2〕	〔3〕	〔4〕	〔5〕	〔6〕
オ	〔1〕	〔2〕	〔3〕	〔4〕	〔5〕	〔6〕

② 二重傍線部(3)と文法的分類が同じものを、次のア～オ(二重傍線部)の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア もと光る竹なむ一筋ありける。(『竹取物語』)
イ いざ桜我も散りなむひと盛りありなば人に憂きめ見えなむ(『古今和歌集』)
ウ 四十に足らぬほどにて死なむこそ、めやすかるべけれ。(『徒然草』)
エ わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば往なむとぞ思ふ(『古今和歌集』)
オ いっしか、梅咲かなむ。(『更級日記』)

問三 傍線部 1 「狩りはねむごろにもせで」・ 2 「いとど桜はめでたけれ」の語句の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 「狩りはねむごろにもせで」

- ア 狩りは難しかったので
- イ 狩りは親切に教えないで
- ウ 狩りは退屈だったので
- エ 狩りは熱心に行わないで
- オ 狩りは十分楽しんだので

2 「いとど桜はめでたけれ」

- ア さらに桜は魅力を増すだろう
- イ より一層桜は美しい
- ウ 桜の素晴らしさは別格だ
- エ 桜は美しくあつて欲しい
- オ やはり、桜は見事なものだ

問四 傍線部 3 「参る」(謙譲語)・ 4 「のたまひ」の「のたまふ」(尊敬語)の「普通語」を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。
ただし、**同じ記号を繰り返し用いてはならない。**

- ア 飲む
- イ 言ふ
- ウ 与ふ
- エ 思ふ
- オ 食ふ

問五 A・Bの歌についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア Aの歌には、端的に桜の美しさが詠まれているのに対して、Bの歌には、屈折した桜の美しさが詠まれている。

イ Aの歌が、反実仮想を用いて、逆説的に桜の美しさを表現しているのに対して、Bの歌は、日本の伝統的価値観に通底する桜の美しさを表現している。

ウ Aの歌が、「惟喬親王」を楽しませようとした「右馬頭」によって詠まれたものであるのに対して、Bの歌は、「惟喬親王」の側近の誰かによって、桜の汚名を挽回するために詠まれたものである。

エ Aの歌が、人の心を落ち着かなくさせる桜の不思議な魅力を伝えようとしているのに対して、Bの歌は、桜が散る直前の一瞬にだけ表出する魅力を伝えようとしている。

オ A・Bの歌はいずれも桜が散ることを詠んだものであるが、Aの歌が、桜への嫌悪感をも表現しているのに対して、Bの歌は、桜に対する称賛だけを表現している。

問六 C・Dの歌についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア Cの歌が、彦星に擬した「右馬頭」によって詠まれたものであるのに対して、Dの歌は、「たなばたつめ（織姫）」に擬した「惟喬親王」によって詠まれたものである。

イ Cの歌が、「天の川」にやって来たのだから「たなばたつめ（織姫）」に宿を借りようという内容であるのに対して、Dの歌は、その宿は彦星のためのものだから、あなたには誰も宿を貸してはくれないという諧謔かいぎやくを含んだ内容である。

ウ Cの歌が、「惟喬親王」の求めに応じた「右馬頭」によって詠まれたものであるのに対して、Dの歌は、寝入ってしまった「惟喬親王」の代わりに「紀有常」が詠んだものである。

エ C・Dの歌はいずれも七夕伝説に拠っているが、Cの歌が、「けり」という詠嘆の助動詞を用いて伝説への敬意を表現しているのに対して、Dの歌は、戯れが昂こじて伝説への不敬を表現するものとなっている。

オ Cの歌は、三句切れであり、Dの歌は、二句切れである。

問七 E・Fの歌についての説明として**間違っているもの**を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア Eの歌は、「右馬頭」が詠んだものであり、Fの歌は、「紀有常」が詠んだものである。

イ E・Fの歌の句切れは、いずれも三句切れである。

ウ Eの歌には、雲間に隠れようとする月を惜しむ気持ちのうちに、「惟喬親王」と共にまだ酒席を楽しみたいという心情が込められている。

エ Fの歌は、「惟喬親王」に代わって「紀有常」が詠んだものであり、月が隠れてしまうのは山の端があるからだという内容のうちに、「惟喬親王」がお休みになるのも仕方がないという心情が込められている。

オ E・Fの歌はいずれも、月が隠れる様子に、「惟喬親王」が寝所に入ることなどをたどっている。

乙 伊勢物語【時雨】^{しぐれ}

むかしありける色好^{（注1）}みなりける女、あきがたになりける男のもとに、

G いまはとてわれに時雨のふりゆけば言の葉さへぞう^{（注2）}つろひにける
返りごと、

H 人を思ふ心の花にあらばこそ風のまにまに^{（注3）}に散りもみだれめ

（注） 1 色好みなりける女——恋の情趣を好んだ女。

2 うつろひ——「うつろふ」（動詞）

① 位置がだんだんに変わっていく ① 居場所が変わっていく。② 心が他の方に移っていく。心変わりする。

② 状態がだんだんに変わっていく ① 移り変わっていく。栄えていたものが衰えていく。② 色が変わっていく。

③（花や葉）が散る。④ なくなる。消える。

3 まにまに——連語。……につれて。……とともに。

（『日本国語大辞典』による）

問八 問題文乙の傍線部「あき」には、二つの意味が掛けられている。その一つは「秋」^{あき}であるが、もう一つは何か。問題文甲の文中の語を適切に活用させて答えよ。

問九 Gの歌について説明した次の文の空欄 A、D を補うのに最も適当な語句を、後の【語群】の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。空欄 B には、和歌の句切れに関する適語を補うこと。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはならない。

まず、Gの歌はAが詠んだもので、Bである。次に、上の句の解釈であるが、「いまはとてわれに時雨のふりゆけば」の「ふり」は、Cで、「降る」と「古（旧）る」の意味が掛けられている。Cは、その意味の違いにたがって、二通りの解釈をする必要があるのです。前者の文脈は、「時雨が降ってきて」となり、後者の文脈は、「わたし（A）が年を取って」となる。下の句「言の葉さへぞうつろひにける」についても同様に、前者の文脈は、「うつろひ」を（注）2の③の意として「葉が散ってしまった」と解釈でき、後者の文脈は、（注）2のDの意として解釈することができるといえる。この内容を受けた返歌がHである。

【語群】

ア 男
イ 女
ウ 作者

工 初句切れ
才 二句切れ
力 三句切れ
キ 四句切れ
ク 句切れなし

ケ 枕詞
コ 序詞
サ 掛詞
シ 縁語

ス
一
①

②

ソ
二
①

タ
二
②

チ
□
③

ツ
□
④

問十 Hの歌について、そこに込められた心情に留意して、八十五字以内（句読点等も字数に含む）で言葉を補って現代語訳せよ。その際、次の【条件】に従うこと。これに反する場合は、採点対象外とするので注意すること。

【条件】

- ・ 一文にまとめること。
- ・ 解答は六十字以上とする。
- ・ 文字は、明確に（丁寧な）十分な大きさで（濃く）記すこと。

【草稿用】

[illegible]